

経験ストーリー

関西のくらしをささえた豊かさの源泉に触れる丹後旅

□シーン0／イントロダクション

日常の生活の中でちょっと気分転換をはかりたい。できることなら、行ったということでもちょっとした自分の話題にできるところがいい。友達との話がはずむようなちょっとしたことがたくさんある場所がいいなあ。そう、がんばって行かなくていいような場所。

ちょっと、おいしいものを食べられたり、緑見たりしてリフレッシュできたり。

この頃、ディスカバージャパンというのですか、そういうのが気になってきたのです。

そこで、どこ出かけようかと検索したり、友人たちの SNS とか見てみたら、丹後がいいとみるようになりはじめた。そういえば家族でカニ食べてたり、天橋立行ったっけ？そういうのは普通だし、お金かかりそうだからいいか。

なんか、みんなのおススメだと、きれいな海辺に味わいのある建築の村があったり、いろいろな種類の日本酒があったり、さまざまな種類の新鮮なお魚が食べられたり、とってもディスカバージャパンな感じ。

さくっと行けば、おなかいっぱいいろいろなことがたのしめそうだ！ いろいろ調べて、丹後へ GO!だ。

※導入部イメージがまだ足りませんが、「SNS」みてたりするようなシーンでしょうか？ カフェやワーキングスペース、もしくは街角のどこかでスマホとか Mac で。

コース 1 :

■ シーン1／シルクの栄華に思いを深める①

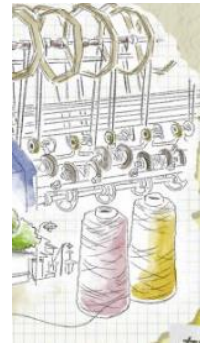
都からも大阪からも高速道路が通り、同じく旅をネタにわいわいできる友人とレンタカーを借りて、2時間もしないうちに着いてしまった。丹後半島の入口にある、与謝野は日本の着物の生地が多くを昔つくっていたという。その時代の建物がそのまま残っている場所。特にちりめん街道といわれる場所は、その家並がすごい。中心にある旧尾藤家に訪問。明治から昭和までの豪勢を極めた建築が、とっても懐かしさを感じさせてくれる。イメージしていた「御屋敷」というのがここであって感激。こんな家が沢山続く、丹後っていったいどういうところだったのだろうか？



■ シーン2／シルクの栄華に思いを深める②

シルクって響きはステキだし、着物は美しいけど、それと豊かさが結びつかなかった。大きな工場ではなくて、ひとつひとつの大きな家で作っていたのですね。すごい。

そんな工場を博物館としてみせてくれるところがあるという。あんな機械やこんな機械で、布をつくったりするのですね。ファッションや雑貨には気をかけても、それがどうできるかってあまり考えたことがなかったから新鮮です。ネタをここでひとつ仕込んだという感じでしょうか。



■ シーン3 / 舟屋の郷へ

丹後半島って、調べてみるととても広いのですね。計画をもってまわらないと、しんどくなっちゃう。

ということで、一気にいちばん遠くまで行ってしまいましょう。

深い入り江に軒を連ねる集落、日常とは異なる美しい景色のある舟屋の郷、気になっていたのです。

途中、天橋立のある入り江を走ります。天橋立の一直線の松原と囲う湾の木々の景色、気持ちいいです。ワイナリーもあった。

道を進めると、絶壁と日本海。キター、という感じがします。

そして、舟屋の郷の伊根へ。道の両側に並ぶ家は軒一軒が舟屋。駐車スペースに止めて、散策します。



■ シーン4 / 舟屋の郷を滞在（その2）

舟屋の郷の中心に、造り酒屋があった。女性杜氏がつくるお酒で、世界のレストランとよばれているところまで採用しているほどの評判の蔵だ。ツレは、さっそく蔵人さんが出してくれたお酒を試飲している。うらやましい。話によると、舟屋の建築でつくっていることもあり、醸造数が限られており、通好みの酒屋さんにしか流通できないそうだ。酒づくりの現場を案内してくれた。限られた面積でどうお酒をつくるのか、おもしろい。



酒粕でつくったスイーツや、古代米の赤いお酒のアルコールを飛ばして地元のミルクと和えたソフトクリームがあるという、甘いものはいただく。丹後を頂いているという感じだ。

前での舟屋を使ってもらってもいいという。澄み切った海が見える。舟屋の向こうには小さな栈橋がくっついている。行ってみよう！海風がきもちいい。

■ シーン5 / 舟屋の郷にて地物で昼食！（その3）

わたしたちのベースキャンプができたから、ご飯をゲットしよう。ご婦人さんのグループが、今日の海の幸、郷の幸で、いろいろなものをつくって、届けてくれた！

伊根は遠洋漁業で財をなし、豪勢な舟屋を建てた漁村だけあって、「魚は獲っているけど村にはない」ということがなくて、いろいろなおかずが売っている、アレコレ買って、舟屋のベースキャンプに戻る。



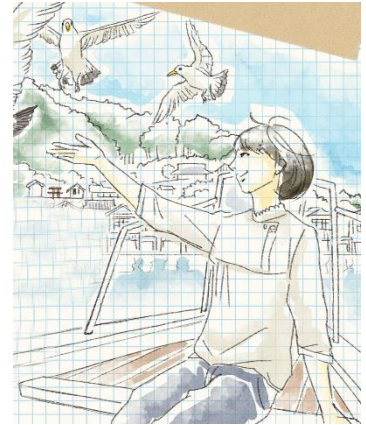
ツレは爛酒のキットまで貸してもらっている。うらやましい。ならと、ワタシも持参したコーヒーを蒸らそう。お水がおいしいのか、景色の所為なのか、とても美味しい！

地元の人も、そんな楽しみ方を仲間うちでしているという、獲れたマグロを解体し、DJセットを持ちだしてパーティとか、ワイルドすぎてすてきだ。絶対行きたい。

■ シーン6 / 舟屋の郷をクルージング

こんなわたしたちをみて、栈橋に船で元気に声をかけるオジサンがやって来た。水上タクシーだけど、遊覧しない？ ここでは、どれに乗ってもひとり1000円で案内してくれるという。ノリでそのまま乗ってみた！

湾内を一周。風が気持ちいい。鳥がたくさん飛んでいる。海から見る舟屋の景色はステキ！



■ シーン7 / 新しい里山とのであい

とってもディスカバージャパンな気分になりたい私が、気になったのは「日本でいちばん小さな百貨店」それも、集落で運営しているという。伊根の山の向こうにあるという。

おなかいっぱい、景色もいっぱい堪能したので、向かってみよう。人の手が入った美しい深い山、本能寺の変の際には、細川ガラシャ姫がこの中のどこかに幽閉させていたという。なんかなっとく。

素朴でかわいらしい看板に「つねよし百貨店」と書いてある。つねよしとは、集落の名前だ。ある種の期待が高まる。お店に入ると、季節に集落で取れた農作物と加工品が、豊富な種類で並んでいる。まさに、里山の百貨店。ついでに、鹿の角まで販売している。

奥に行くと、子どもたちの遊び場や、コワーキングスペースがあり、これはまるで百貨店というよりも北ヤードのナレッジキャピタルや渋谷のヒカリエみたいではないか！とツッコみたくなる。

ご主人さんによると、チャレンジというのは、家族で東京から移民して、この「百貨店」を引き継いだからとのこと。里山のこと、食材の

こと、話が弾みます。ツレは、「百貨店」に集まる、子どもたちや地域のお年寄りといろいろ話しています。

里山って、言葉には聞くけど、工夫のある食材、他とは少し違うお野菜とかあって、ぐいぐい惹きこまれますね。



■ シーン8 / 宮津でみやさんぼ（夜） → クロージング

暗くなってきました。そろそろ戻らないといけません。そういえば、宮津の町に立ち寄るのを忘れていました。お茶して、今日の旅の思い出をいろいろ話して、帰りましょう。

町屋を改装した、小さなカフェで、地元産のくだものを使ったスイーツをいただきます。食材が濃くておいしいです。今日のことなどを話していたら、カフェのマダムが、宮津もいいよといひます。「飲ん

兵衛」のツレは、目がらんらんです。かくいう私も飲みたいし、食べたいです。一緒に呑み歩ける、地元の気さくなひとを連れてきました。宮津の地元の人が、私たちのような人を案内して一緒にたのしむのを「みやさんぽ」というそうです。



B級グルメのカレー焼きそば、おばちゃんがステキなスナック、今日は土曜日です。今晚は落語会があるゲストハウスや、アニメに出てきそうな木造のどこか懐かしい旅館が朝食だけでも気軽に泊まれるといえます。泊まって行きましょう。

この晩は、もっと多くの丹後半島での、おいしい、たのしい、きれい・すごいを、地元の方々から教えてくれました。翌朝は、温泉で朝湯に入り、市場でとっても滋味のある野菜と素晴らしかった干物を買いました。とっても、リラックス。

丹後半島にははまりそうです。ジャパン！

コース2

□ シーン1／丹後半島の酒蔵

わいわいツレと話している間に、あっという間に丹後に入りました。

まずは、個性派揃いという酒蔵が気になるので、訪問しましょう。

この「ハクレイ酒造」は、もともと北前船の船主のお家をはじめた酒蔵。特徴はなによりスイーツ。お酒のうまみをふんだんに使ったスイーツは、地元の豊かなくだものとともにとても濃厚で美味しくて幸先いいです。蔵も見学します。女性の元気なスタッフがお酒のこと、いろいろ教えてくれます。ひとつひとつのお酒に物語や背景があって、飲みたくなってしまいます。あ、ツレは試飲している！ひどい。

重厚な建築に時を忘れていたら、会長さんが招いてくれました。隣には、北前船の時代の財で築いた館が。素晴らしい屏風、そして設え。ガラスは、オランダから輸入し、港から牛車で運ばれたという。時代の栄華により一層時を忘れます。



□ シーン2／おさかな博士のお寿司タイム

丹後の海には、ほんとうにたくさんの種類のお魚がおります。「いか」だけでも、季節などの変化によって何種類も獲れ、どれもおいしいとのこと。そんな海の豊かさを、その日や近日に港にあがった地魚で寿司ネタをつくり、握ってくれるお寿司屋さんが宮津にはあります。魚への探求心が高じて、家族ぐるみで



お魚について勉強し、お魚博士な板前さんがそれぞれのネタにあった調理法で握り、その魚の知識とともに食べさせられます。詳しいのは、お魚だけではなく、一緒に薦められる地酒の数々も。まぐろも、かにも、サーモンも、ベーシックにはない、地魚だけのお寿司屋さん。丹後の海の豊かさを、味わいながら、多彩なおさかなの表情やトリビアで大いに堪能させてくれました。

□ シーン3／宮津でみやさんぽ（昼） いか徳利にハマる編

人々が、丹後の恵みをより豊かにしてくれる、そんな、わくわくさせてくれる出会いを、宮津の町のひとたちが教えてくれます。宮津の人たちが、町のちょっとしたおもしろさを教えてくれる、「みやさんぽ」と SNS で遭遇、一緒にたのしんでくれる町の達人とであいました。港町らしい体験ということで案内してくれたのは「いか徳利」づくり、お兄さんがしゅっしゅ、しゅっしゅ、と作っていきます。

つくりませんかと誘われて、「いか」をぷっくり膨らませました。わー、びっくり、おもしろい。あのお寿司屋さんで、この徳利で地酒、飲めばよかったなあ。家帰ったら、丹後のお酒で試してみよう！



□ シーン4／宮津でみやさんぽ（昼） カフェ歩き編

宮津は室町時代からの城下町、細川家に代表される京につながる重要人物が配されてきた歴史と北前船拠点の栄華は、小さい町でありながら味わい深い佇まいを残している。そんな歩くことで発見が溢れる宮津の町を、みやさんぽの「達人」と一緒に歩いて案内してくれます。

ちょっとした場所に、ちょっとした物語が、町のつぼにどんどん惹きこまれます。

落ち着きたいと思ったら、絹織物時代の栄華をひきずるカフェや洋食屋さんの存在も、この町の特徴。地物のくだものやミルクによるスイーツは濃厚でおいしいです。

歴史がざくざく詰まっている、さんぽがたのしい小さな宮津。とってもハマってしまいます。



□ シーン5／シルクの再興に思いを深める

何百年もの豊かさの定期預金が詰まっているような丹後半島、その栄華を活かして悠々自適に楽しませてくれる、地域の人々とのあいには、また、来たいな、過ごしたいなという、愛着が生まれてきました。あそんな小さな旅の最後に、どうしても行きたいところがありました。

百貨店のメンズ特集でみた、父や彼氏に気になっていた、ネクタイやマフラーをつくるブランドが、与謝野の機織の郷にあったのです。そこでは、デザイナーであり、自らも機を手で織る、イケメンの織元さん

が待っていてくれました。継承した際には、2台だった手機、今では10台以上、休みなく動いています。

丹後の絹織物の豊かさを今に継承したい、そこで生み出される生地は世界でもここだけのもの。それをカッコいい紳士のアクセサリーとして独自のブランドで送り出しています。



手機への想い、丹後への想い、ものづくりとデザインの話で盛り上がるなか、今日過ごした豊かさが過去のものでなく、これからのわたしたちのものであることも実感しました。

次はどんな、普段着の上質に出会えるのだろう、もっと知りたい、もっと来たい丹後になりました。

□ シーン6 / クロージング

手機の工房を出てからも、与謝野の郷の大きな町家から時折機音が鳴り響いています。

たぶん、丹後というキーワードを耳にし、調べなければ、まずはわからなかった、奥行きがたくさんありました。

丹後に着いてみたら、そこから先は、その豊かさを今に活かし、遊ぶ地元の人たちが、導いてくれた、魅力の連鎖。

そんな縁をいただいたので、もっとそれを手繰り寄せて、私も丹後の豊かさの宝探しをもっとしたい、そんな気分になさしてくれました。手許には、大事な人への絹織物のおみやげ、地酒や農作物、それに海産物など、自分やツレたちで、家や仲間のスペースでどんどん楽しみ、自慢を膨らます戦利品たちが残っています。尽きたら、また、来ないといけないなあ。

